

タイトル	祖父と父からイングリッドが受け継いだもの
著者	森川，慎也；MORIKAWA, Shinya
引用	北海学園大学人文論集(69)：75-95
発行日	2020-08-31

祖父と父からイシグロが受け継いだもの¹

森 川 慎 也

はじめに

カズオ・イシグロの文学を貫くテーマに理想主義とノスタルジアという二つの概念がある。この二つの概念はイシグロ自身がたびたびインタビューで言及するものだが、イシグロの文学を振り返ってみると、そこには一貫してこの二つの概念が底流していることがわかる。

理想主義から見ていくと、国家や人類に微力ながらも貢献したと信じる語り手が年老いてからその理想主義的な青年時代を回顧するパターンがイシグロ文学に見られる。*An Artist of the Floating World* (1986) の元画家 Masuji Ono, *The Remains of the Day* (1989) の老執事 Stevens がその典型である。Ono は自身の画家活動を通して国家に貢献したと信じ込もうとするし、Stevens は国際的な政治力を持った主人に仕えることで間接的に人類に貢献できたと自らに言い聞かせる。しかし、いずれの場合も、彼らの理想は物語内世界で破綻している。20 世紀前半の上海とイギリスを舞

¹ 本稿は日本英文学会北海道支部第 64 回大会の文学部門シンポジウム「イシグロの世界をひらく」(2019 年 11 月 30 日、於：北海道大学)で口頭発表した原稿「祖父と父からイシグロが受け継いだもの」に大幅な加筆を施したものである。なお、口頭発表の原稿を短く書き改めたものを同大会の Proceedings に寄稿している (http://elsj.org/hokkaido/proceedings2019/morikawa_shinya.pdf)。本研究は北海学園大学共同研究(研究代表者：テレント・アイトル)の助成を受けている。

台にした *When We Were Orphans* (2000) でも、上海で失踪した両親を救出し、世界を救済することが自らの使命だと信じて疑わない探偵 Christopher Banks が登場する。イシグロ作品で繰り返し描かれるこうした理想主義的な人間像はいったいどこからきているのか。別のところで、筆者はイシグロの描く理想主義的人物像が、彼が青年期を送った 1960 年代のイギリスの理想主義、さらに青年時代に読み耽ったプラトンの思想によって形成されたのではないかと論じたが(森川 24-38)、本稿の前半では、イシグロ文学に顕著に見られる理想主義を 20 世紀前半の上海の東亜同文書院で学んだ彼の祖父石黒昌明の来歴に関連づけて考えてみたい。

他方、ノスタルジアについては、年代ごとにイシグロの捉え方に変化が見られる。彼は日本を舞台にしたいいくつかの短篇を 1980 年に出版しているが、幼少期の長崎の記憶をどうにか保持するためにそれらの作品を書いたと語っている (Ishiguro, "Introduction" 8, 12)。しかしイシグロの長崎へのノスタルジアは彼の記憶のみで構成されているわけではない。イシグロ自身が証言しているように (Hunnewell 27)、母静子から聞かされた戦時中の長崎の話や 1950 年代の小津安二郎らの映画の影響を受けながら構築された記憶であることを認めている。イシグロの中で自身の記憶と他者の記憶、そして映像とが融合し、記憶と思弁と想像によって日本(そして長崎)が構築されたと言える (Mason 9)。つまり、1980 年代初頭にイシグロの中で醸成されたノスタルジアは、幼少時代に過ごした日本(長崎)に向けられたものであった。ところが 1990 年代に入るとイシグロのノスタルジアの捉え方に微妙な変化が見られる。日本の記憶という特定の場を前提にした郷愁から、幼少時代全般への郷愁へとシフトしたのである。言い換えれば、イシグロはノスタルジアを拡大解釈し、それを子供時代への郷愁として捉え直した (Morikawa 78)。それは幼少期の fragile な世界、すなわち大人たちの善意に守られた幼少時代という過去への郷愁である。イシグロのいうノスタルジアに、永遠に失われてしまった幼少時代への郷愁というやや特殊な意味が込められるようになったのはなぜか。筆者はその背景に父鎮雄の影響があったのではないかと考える。そこで本稿の後半で

は、1990年代後半に父鎮雄が息子に語った上海での幼少時代の記憶を取り上げ、イシグロが言及するノスタルジアの形成について考えてみたい。

上海で長年過ごした祖父昌明の来歴と幼少期を上海で過ごした父鎮雄の来歴——これらもまたイシグロ文学に一貫して流れる理想主義とノスタルジアの形成に寄与したのではないか。言い換えれば、イシグロは祖父と父からこの二つの概念を受け継いだのではないか。このような問いを立て、考察に入る。

I. 祖父，東亜同文書院，理想主義

イシグロの祖父昌明に関する資料はほとんど残っていない。しかし、限られた資料をもとに昌明の人生を辿っていくと、興味深い事実突き当たる。それは、彼が東亜同文書院の卒業生だということ、中国で足掛け30年ほど暮らしたこと、上海の豊田紡織廠の常務取締役をしていたことなどである。とりわけ東亜同文書院の卒業生という事実は、イシグロの文学に見られる典型的な理想主義的人間像を考えるうえで、新たに考慮すべき点のように思われる。その前にまず昌明の人生を辿っておこう。

イシグロの父鎮雄と母静子から直接話を聞いた平井杏子によれば、イシグロの祖父石黒昌明は、1884年滋賀県大津市に生まれ、日露戦争開始の翌年1905年に上海の東亜同文書院に五期生として入学している（平井30）。1905年は上海租界に在住する日本人の数がイギリス人に次いで二番目に多くなった年でもある（榎本148）。東亜同文書院が上海に創設されたのは1901年。同文書院は外地にありながら名門校とされ、各都道府県から選抜された給費生が在学生の多数を占め、内地のナンバースクールと言われた一高、二高と「肩を並べる学校と言われる」までになったと西所正道は述べている（29）。「中国の保全」と「日中の共存共栄」をめざし、それを実現するエキスパートを養成」することを目的に創設され、「ビジネス、文化交流を通じて、日本、中国、朝鮮の三国と真の連携を図り、アジアの平和を実現する」という理念が掲げられた（西所7）。初代院長の根津一が起草

した「興学要旨」には「中日友好協力の基礎を固める」とあり（西所 27）、1945 年の閉校まで 45 年にわたって四千数百人の卒業生を輩出した。商業専門学校として開校した同校では、中国語の習得が重んじられ、一年生が校庭で中国語の発音を練習する風景は「書院カラス」と呼ばれ、学校の風物になった。後年、英文学者の朱牟田夏雄が同校で英語を講じている（朱牟田 12）。昌明が東亜同文書院で学んだのは 1905 年から 1908 年までと推定される。同文書院の伝統の一つに「大旅行」という中国全土・東南アジアを対象とした実地調査旅行があった。大旅行が始まったのは五期生からで、昌明もグループで熱河を調査し、その内容を報告書にまとめ、東亜同文書院學友会発行の『會報』の第六號（1908 年）に寄稿している（石黒 30-43）。大旅行に出立する上級生に向けて下級生が歌った大旅行壮行の歌「嵐吹け吹け」の作詞を担当したのも昌明と同じ五期生の阿南鎮民である（安澤 59）。同じく五期生でのちに外交官として活躍した石井猪太郎は、同文書院で培われた「中日両国の唇齒輔車觀念」によって自身の「ユートピア的理想」が育まれたと自伝で述べている（qtd. 栗田 150）。二十五期生の安澤隆雄も同文書院が「理想実現に働く人材の育成」に注力したと回顧している（安澤 18）。

かつて上海の豊田紡織廠と中国紡織機器製造公司以 1922 年から 1949 年まで 27 年間勤めた稲葉勝三は、あるインタビューで昌明について語っている。稲葉によれば、昌明は東亜同文書院を卒業後、伊藤忠に就職し、漢口支店長を務めていたそうである（稲葉他 6）。一方、鎮雄にインタビューした平井によれば、昌明は「伊藤忠商事に勤め、上海支社の支店長にまで上り詰めたが、やがて現地では中国人雇用者とのあいだにさまざまな労働争議が起こり、事態を收拾するために責任を取るかたちで退社を余儀なくされた」とある（平井 30）。1920 年代を通して工業化した上海では、工場の増設に伴い中国人労働者が増加し、日本の紡績工場でストライキが頻発した（劉 243-44）。1925 年には反日感情が一気に悪化し、5.30 事件に至る。工場労働者のストライキや 5.30 事件の様子は横光利一の『上海』にも描かれている。その後、昌明は豊田紡織廠の上海支店に役員として引き抜かれ、



図1 東和男『創成期の豊田と上海』p.55 より

稲葉によれば、「営業」(6)や「為替」(稲葉他31)を担当したようである。東和男の著書『創成期の豊田と上海』によれば、1921年に開業した豊田紡織廠は「原綿を米国中心に、中国、インドなどから仕入れ、綿糸布を製造」していた(東59)。

同著にはその当時の昌明が写った写真が掲載されている(図1参照)。後列右から二番目が昌明である。1922年に撮影されたもので、当時昌明は三十八歳だった。東亜同文書院を卒業しているだけあって、稲葉は昌明が「中国通」だったと回想している(稲葉他7)。

1920年代に日中関係が悪化する中、昌明は1927年に妻、二人の娘、そして長男鎮雄を長崎に移住させている(平井32)。鎮雄が七歳のときである。平井によれば、「昌明氏はその後もしばらく中国と日本との間を行き来し、一年ほどは東京でホテル住まいをして残務処理に当たっていたが、その後、長崎で暮らす家族のもとに戻った。長崎に定住した年は明らかではないが、1937年(昭和12)に勃発した盧溝橋事件より、何年か前のことであったと思われる」とある(平井34)。稲葉にインタビューした桑原哲也は『上

海在留邦人人名録 第 26 版』を参照し、注の中で「豊田紡織株式会社の 1934 年の経営陣は、豊田利三郎取締役社長、西川秋次専務取締役²、石黒昌明常務取締役となっている」ことを確認し、「西川と石黒が〔上海に〕常駐していた」と書き記している（稲葉他 58）。とすれば、昌明は 1934 年頃まで上海に残っていた可能性がある。昌明は 1905 年に東亜同文書院に入学しているので、足掛け 30 年近く中国に、そしてその大半を上海に住んでいたことになる。

平井によれば、昌明は長崎に移り住んでからは自治会長を務め、「町内でも一目置かれる人物として長崎の暮らしに溶け込んでいたものと思われる」（36）と述べている。イシグロがしばしば回想する祖父昌明はこの当時の記憶によるものと考えられる。2015 年にテキサス大学オースティン校 ハリー・ランソム・センターがイシグロから購入した資料 Kazuo Ishiguro Papers（以下 KIP）には祖父母の写真が含まれている（図 2、3 を参照）³。

イシグロは五歳まで長崎の家で祖父母と同居し、とりわけ昌明に懐いていたようである。平井によれば、祖父母を長崎に残して石黒家がイギリスに移り住んで 11 年がたった 1971 年に昌明は八十七歳で亡くなっている（43）。

東亜同文書院の歴史は、西洋列強による帝国主義的拡大に遅れまいと中国に乗り込んだ日本の歴史の一部を形成する。日本軍の上海への進出は「日本の帝国主義的な拡張政策を体現するもの」という見方もある（榎本 147）。事実、太平洋戦争が開始されると、日本軍は共同租界に侵攻し、英米人の収容を始めた。その様子は J. G. Ballard の自伝的小説 *Empire of the Sun*（1984）で皮肉にも日本の戦闘機に憧れるイギリス人少年 Jim の視点

² 図 1 の後列左から 3 番目が西川である。

³ 以下の写真の中には、ハリー・ランソム・センターに保管されている Kazuo Ishiguro Papers の一部を著者が撮影したものも含まれる。写真の転載については、同センターの許可（2020 年 5 月 27 日付）と、RCW Literary Agency を通じてイシグロ本人の許諾（2020 年 5 月 22 日付）を得ている。



図2 祖母嘉代と祖父昌明
(KIP, Box 64, Folder 4)



図3 幼いカズオと昌明
(KIP, Box 64, Folder 4)

から描かれている。共同租界における中国人に対する日本軍兵士の横暴なふるまいは、戦争末期の1945年に上海を訪問した堀田善衛の『上海にて』で冷徹な筆致で描かれている（堀田 113-14）。一方、同文書院は何度か上海で校舎の引越しをしているが、いずれも租界の外にあった。上海租界の歴史は19世紀半ばのアヘン戦争後の割譲まで遡る。イギリスの他にも、フランスやアメリカが独自の租界を持ち、のちにイギリスとアメリカの租界が統合され共同租界となる。日本人の多くは共同租界の虹口地区に住んだが、鎮雄によれば、石黒家は共同租界の区域外にあった Jessfield Park の近くに居を構えたようである。1915年には租界内の外国人の中で日本人の数がイギリス人の数を抜いて最も多くなる（榎本 55）。1917年のロシア革命後には、多くのロシア元貴族が上海に亡命し、ヨーロッパで反ユダヤ暴動が激化すると、多くのユダヤ人がビザを必要としなかった上海に流れ込んだ。最も多い時で上海の租界に住む外国人の「国籍は五八」にも及んだと言われている（榎本 12）。

東亜同文書院の卒業生たちは、本来であれば同校の理念である日中共存という理想を掲げて社会に出て行ったはずである。しかし日中戦争の開始とともに、そうした理想とは裏腹に東亜同文書院の学生たちは、従軍通訳として召集される。東亜同文書院は「戦中から戦後にかけて、「スパイ学校」、あるいは「帝国主義日本の手先」などという汚名」がつきまとう（西所 9）。栗田尚弥も、同文書院について「戦後においても「植民学校」「スパイ学校」「下級外務官僚養成所」というような評価がしばしばなされている」（栗田 13）と指摘する。実際、日露戦争でも日中戦争でも、書院生は従軍通訳に駆り出され、彼らが在学時に実施した大旅行の報告書が軍部にも提出された事実があったようである（西所 9）。西所は、多くの書院生たちが日中共存共栄の理想と敵国侵攻という現実との「振れ」に苦しんだのではないかと推察している（西所 10）。

日中戦争の最中に書院生たちが理想と現実の狭間で引き裂かれる様子を克明に描いたのが、四十四期生で戦争末期の東亜同文書院で学んだ作家大城立裕の小説『朝、上海に立ちつくす——小説 東亜同文書院』である。1983 年に出版された同作において、大城は自身の同文書院での体験をもとに、戦争末期の中国で同文書院の教授、学生そして卒業生たちが戦争に疑問を抱きながらもそれに巻き込まれていく様子を描いている。各都道府県から選抜されて上海にやってきたという「自負心」が学生たちの間で「連帯」を強め、創立当初に根津が掲げた「欧米の侵略から中国を守らねばならぬ、中国を救わなければ日本も危ない」という理念を「共有自覚」として持った学生たち（大城 76）。その学生たちの「理想は高」く（77）、「東亜同文書院というのは、理想高邁なんだから」（大城 247）という台詞も作中に挿入されている。しかし同時に同文書院の負の側面もそこには描かれている。日本に併合された朝鮮からの留学生は、沖縄出身の主人公に向かってこう言う——「東亜同文書院という学校は、日本のつくった宿命的な傑作だと思う。[中略] 日本と支那との固い結びつきを象徴するものでありながら、その脆さもそこに象徴的にあらわれているという気がする」（大城 198）。

同作の解説で、鹿野政直は同文書院の卒業生たちの、今は亡き母校へのノスタルジアをこう表現している――

東亜同文書院の卒業生の少なからぬ人びとにとって、母校への気持ちは、通常のノスタルジアの域を超えて複雑なようにみえる。それは、母校がいまやなく、同窓生たちもやがて全て消えてゆく、とのやや特殊な運命の共有感にもとづいているが、より深いところでは、中国にとっておのれが何であったのかとの、打ち返してやまぬ問いに由来する（鹿野 337）⁴。

鹿野はこう指摘した上で、「大城と同級であった長谷川良一氏（早稲田大学文学部教授）は、日本で心に描いていた大東亜共栄圏の理想と、上海でみた現実との落差に、少年として激しいショックを受けた、と語ってくれた」と回想している（鹿野 337、傍点森川）。

むろんイシグロの祖父昌明が東亜同文書院で学んだのは20世紀初頭である。大城が描いた1940年代半ばの上海に彼の姿はなかった。書院生が従軍に駆り出された1940年代には、昌明はすでに長崎に移住し、隠居生活を送っていた。したがってこの時代の書院生たちの理想をそのまま若き日の昌明の人間像と結びつけることは危険である。そもそも東亜同文書院が掲げた日中共存という理想にどこまで昌明が共鳴していたのかもわからない。しかし同文書院卒業後も中国に残り、30年近く中国に住み続けた昌明の来歴を考慮するならば、彼もまた同文書院の理想の実現に奔走した同窓の一人だったと考えることもできるのではないか。もしそうだとすれば、東亜同文書院の卒業生の一人として、戦争の最中に同文書院の存在が理想

⁴ 同文書院の卒業生が抱く「母校がいまやなく、同窓生たちもやがて全て消えてゆく、とのやや特殊な運命の共有感」という鹿野の指摘について、日本英文学会北海道支部大会後に、莊中孝之氏がこの感覚は、*Never Let Me Go* で母校 Hailsham を失い、臓器提供によってやがて全て消えてゆくという特殊な運命を課せられた Kathy たちクローンの共有感覚に通じるのでないか、といった趣旨の発言をされたことを付記しておきたい。

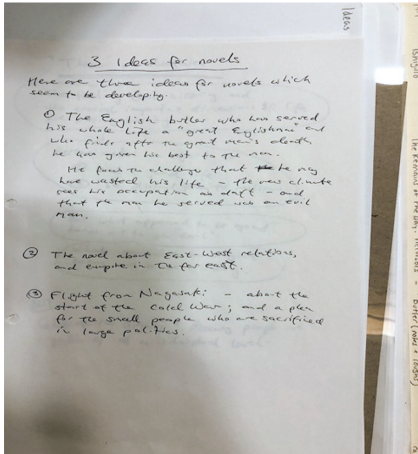


図4 “3 ideas for novels”
(KIP, Box 17, Folder 1)

と現実との狭間で引き裂かれていく状況に昌明自身も思いを馳せたのではないだろうか。思えば、イシグロが描く老人たちは、*A Pale View of Hills* (1982) の Ogata にしろ、“The Summer after the War” (1983) の Oji にしろ、*An Artist of the Floating World* (1986) の Ono にしろ、戦時中の国家に貢献するという理想を掲げ、戦後にその理想を一方的に否定される立場に追い込まれる。イシグロの記憶に

残っている祖父昌明は、孫に自身の葛藤を微塵も見せなかったに違いない。しかし祖父の来歴を両親から聞かされるうちに、イシグロは祖父の過去にそうした理想と現実の「捩れ」があったことを知ったのではないか。イシグロが自作に登場する人物について語っている言葉がある——「人間は何か善き事のために一所懸命働こうとするものです。社会とか人類とかのために何かしたいと考え、自分の命さえ捧げるのを惜しまない。しかし、人生の終わりに至って、人間はそれが誤りだったと悟る」(池田 145)。つまり、イシグロが繰り返し描く理想主義的人間像の核心に、東亜同文書院の理想主義とは言わずとも、同校で学んだ祖父昌明の理想主義的傾向が影を落としている可能性がありうるのではないかと考えられる。*The Remains of the Day* を構想していた 1985 年から 86 年にかけて、イシグロは同作の他に二つのアイデアを書き留めている(図4を参照)。一つは“Flight from Nagasaki”というタイトルの作品であるが、これは結局完成には至らなかった。もう一つは、“The novel about East-West relations, and empire in the Far East”と書かれたテーマで、これについては別の紙に、その舞台として日本、シンガポール、そして上海の地名を挙げている(KIP, “EAST-

WEST NOVEL Novel 3 Another variation outline”)。またこうも書き留めている——“Idealistic young men, jaded failed old men. Inability to transcend political climate”（KIP, “EAST-WEST NOVEL Novel 3”）。理想主義的な青年と人生に失敗し疲れ切った老人とを対比しつつも、いずれも「政治思潮を超越することはできない」とメモしたイシグロの脳裏に、直接には知り得ない祖父の理想、そして東亜同文書院の理想主義が過ったのではないだろうか。

Ⅱ．父鎮雄の上海へのノスタルジア

イシグロの父鎮雄は1920年に日本で生まれ、幼少期を「上海や天津」で過ごした（平井 30）。1923年には上海と長崎を結ぶ定期航路が開設される（榎本 149）。鎮雄は七歳で長崎に移住し、福岡の明治専門学校で電気工学を学び、卒業後は陸軍に入隊し、東京で終戦を迎えた。戦後は中央气象台、長崎海洋气象台に勤め、エレクトロニクス技術を用いた潮位や高波の研究で高く評価され、1960年にイギリスの国立海洋研究所に主任研究員として着任し、以後定年まで勤め、2007年に八十七歳で永眠している（平井 37, 42, 44）。

祖父昌明が東亜同文書院の理想を体現するような人だったのかどうかは実際にはわからないが、父鎮雄は理想主義的傾向の強い人だったようである。1991年にイシグロを特集した日本の雑誌 *Switch* の記事によれば、「父親は少し気難しいところがあって、社会のために何かしたいという思いの強い人だそうだ。このあたりは彼の小説の中の父親像にいくらか反映されているのかもしれない。退職した今は、盲人のための文字判読機を作っているという」（「Sydenham's Voice」101）とある。平井も父鎮雄の「こうした社会へのまなざしが、イシグロにも受け継がれているのだろう」と述べている（44）。しかしここでは鎮雄の理想ではなく、彼の上海へのノスタルジアを取り上げたい。イシグロが鎮雄について述べたインタビューでの発言と鎮雄が息子宛に書いた手紙等を手がかりにする。

平井によれば、鎮雄の母（イシグロの祖母）が亡くなった 1981 年、鎮雄は葬儀のために日本を訪れ、「父昌明の上海時代の写真やアルバム」をイギリスに持ち帰ったそうである（43）。イシグロも父から上海時代の話聞かされたと言言している（Hunnewell 50）。イシグロに語った父鎮雄の話によれば、七歳で上海を離れる前に、癌に冒された中国人の使用人に別れを告げるために、銃を携行した父昌明に連れられて会いに行ったようである（Hunnewell 50）。ハリー・ランソム・センター所蔵の KIP によれば、イシグロが *When We Were Orphans* を執筆していた 1998 年に、鎮雄はふたたび長崎を訪問している。長崎中央図書館で上海に関する文献のリストを作り、『写真集 懐かしの上海』（編者小堀倫太郎、1984 年）を複写し、そのコピーを息子に送った。日本語が読めない息子のために同著の数多くのキャプションを英訳している（KIP, Box 86）。鎮雄は几帳面に英文をタイプした手紙の中で上海での幼少時代にも触れている。同封された 1930 年代の上海地図には、上海の土地勘のない息子にわかるように、自宅、Jessfield Park、イギリス人子弟のパブリックスクール、Yu Yuen Road（Youeng Road と表記）、東亜同文書院の位置に蛍光ペンで印がつけられている（図 5 参照）。別の手紙にはそれぞれの場所について短いコメントが付されている（KIP, “Dear Kazuo”）。Jessfield Park が自宅から近く、よく遊びに行ったこと、戦争のために実現しなかったが、日本人学校ではなく、イギリス人子弟のパブリックスクールに自分を通わせようと父昌明が計画していたこと、父昌明が東亜同文書院で学んだことなどが記されている。

石黒家は共同租界の西側に伸びた Yu Yuen Road に住んでいた。石黒家の自宅から目と鼻の先に Jessfield Park があった。2016 年出版の Keiko Itoh の英文小説 *My Shanghai, 1942-1946* には、豊田紡織廠に勤務する人物が Jessfield Park の近くにある豊田紡織廠の宿舎に住んでいる（同公園の北東に豊田紡織廠工場もあった）という記述があるが（Itoh 81）、石黒家は西洋建築の家に住んでいた。鎮雄は息子宛ての手紙の中で、Jessfield Park にあった馬の石像の感触を覚えていると書いている（“‘The Horse’ was near the entrance of the park, but inside the park. It was made of stone.



図5 鎮雄が蛍光ペンで印をつけた1930年代の上海地図
(KIP, Box 86)

I still remember my feeling of the stone surface when I ride (sic) on it.”)
(KIP, “Dear Kazuo”). その石像に跨る幼い鎮雄の写真が同センターに保管されている（図6参照）。イシグロはしばしば自身の鮮明な長崎の記憶について語るが（Ishiguro, “Introduction” 10-11），鎮雄の上海時代の記憶にも同じことが言える。ちょうどイシグロが五歳で長崎を離れたように，鎮雄が上海を離れたのも七歳である（平井 32）。両者とも幼くして自分が馴染んだ土地を離れたことで，幼少時代の出来事が鮮明に記憶されたのかもしれない。ただし，イシグロによれば，鎮雄は長崎移住後も，学校が休みになると上海に戻っていたようである（“My father went to school in Japan, returning to Shanghai in the holidays, e [森川注：i.e. &] lived there till the outbreak of WWII” (KIP, 26.3)）。イシグロ自身，鎮雄が送ってくれた先の写真集や上海時代の家族アルバムによって想像力を刺激されたと述べ

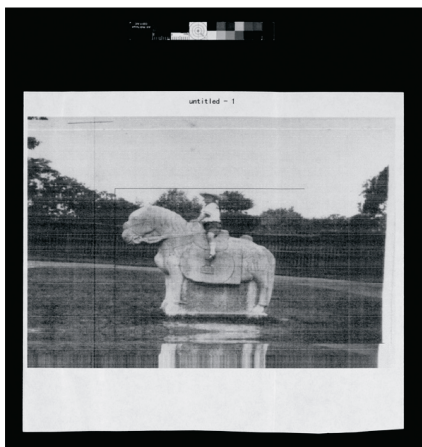


図6 若い鎮雄, Jessfield Park にて
(KIP. Box 86)

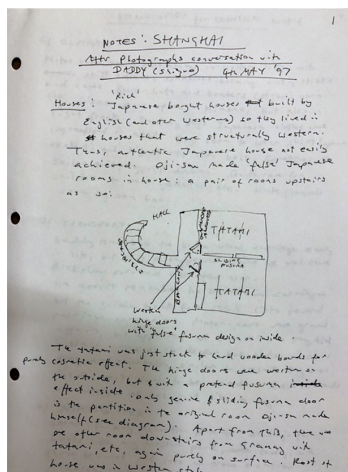


図7 イシグロのメモ
(KIP, Box 26, Folder 3)

ている。もっとも、当時 *When We Were Orphans* の執筆は相当進んでおり、鎮雄の話が作品に大きな影響を与えたわけではないと断っている（KIP, “My father, Shizuo...”）。

イシグロと父鎮雄の記憶の鮮明さは彼らが回想する自宅についても言える。イシグロが長崎時代の自宅内部を頭の中で再現できると言うように (Ishiguro, “Introduction” 10), 鎮雄もまた息子に上海時代の自宅の間取り

を語っており、それをイシグロ自身が書き留めている。それが“Notes: SHANGHAI After Photographs conversation with DADDY (Shizuo) 4th MAY '97”というメモである（図7参照）。1997年5月4日の日付で、イシグロは鎮雄との会話を書き留めている。タイトルに“Photographs”が含まれていることから、上海時代のアルバムを見ながら父と会話したと想像される。鎮雄が語った家の間取りをイシグロが書き残しているが、その文章が興味深い。“Houses”の項目でイシグロ

はこう書き記している — “Houses: ‘Rich’ Japanese bought houses built by English (and other Westerners) so they lived in houses that were structurally Western. Thus, authentic Japanese house not easily achieved.

Oji-san made 'false' Japanese rooms in house: a pair of rooms upstairs as so”
自宅の構造は西洋建築なのだが、内部は日本風の部屋に改造されてあった。
この文章のすぐ下で、鎮雄から聞いた上海の家の間取りをイシグロはイラストにして書き残している（図7）。このイラストを見ると、二階の二つの部屋には畳が敷かれてあり、部屋は襖で仕切られている。1940年代の上海を舞台にした林京子の短篇集『ミッシェルの口紅』には、日本人が洋間に畳を敷いたりマントルピースにベニヤ板を打ちつけたりして、洋館を勝手に日本風に改造するので、日本人に家を貸すのを嫌がるイギリス人差別への言及があるが（林 212-13）、裕福な日本人の家ではそういう改築が行われたようである（ただし林の自宅は虹口地区にあった）。石黒家の自宅は、ドアの外側に蝶番がついていて西洋風なのだが、内側には「偽の（false）」襖のデザインがされてあったとイシグロはメモしている。興味深いのは、イラストの下の記事でも繰り返し「本物」（“authentic”, “genuine”）と「偽物」（“false”, “pretend”）といった対立する意味の言葉が用いられている点である。このメモは、*When We Were Orphans* に登場する日本人少年 Akira の住む上海の自宅を語り手 Christopher Banks が回想する次の描写に活用されている――

Most remarkable were the pair of '*replica*' Japanese rooms Akira's parents had created at the top of the house. These were small but uncluttered rooms with Japanese tatami mats fitted over the floors, and paper panels fixed to the walls, so that once inside—at least according to Akira—one could not tell one was not in an *authentic* Japanese house made of wood and paper. I can remember the doors to these rooms being especially curious; on the outer, 'Western' side, they were oak-panelled with shining brass knobs; on the inner, 'Japanese' side, delicate paper with lacquer inlays. (*WWWO* 71-72; italics added)
ドアの「西洋風の」外側にはオーク板が張られ、真鍮のノブがついているが、「日本風の」内側には上質の紙が張られ、漆塗りのはめ込み細工が施されている。このように Akira の家は西洋と日本という二つの文化が折衷

案的に両立する空間として描かれている。この和洋折衷型の家の描写が重要なのは、このあとに Akira が Christopher の両親が不仲なのは Christopher が十分にイギリス人らしくないからだ、と助言する話の伏線になっているからである。上海で日本人のアイデンティティを保つことを両親から期待されていると思い込む Akira は、友人の Christopher に向かってイギリス人のアイデンティティを保たなければ彼の両親が不仲になるのだと諭す。上海という多文化空間で暮らしながら、少年たちはアイデンティティの拠り所を自らが帰属する国家に求めようとする（Akira は特にその傾向が強い）。しかし、そのアイデンティティは、上の引用が示すように、実際のところ二つの文化が表裏一体となって形成されたものである。にもかかわらずかつて彼らの幼少時代を形成した上海租界という特殊な多文化空間は日中戦争の開始とともに崩壊しつつあった。そこにイギリスから舞い戻ったのが 30 代になった Christopher である。彼は東亜同文書院創設と同年の 1901 年生まれに設定されている。物語の後半では、成人した Akira と思われる日本人兵士に向かって Christopher が幼少時代の上海を語り始め、日本人兵士はノスタルジアという感情の重要性について語る（*When We Were Orphans* 263）。

このように父鎮雄の共同租界時代の上海に関する記憶は、父から子へと受け継がれ、一部ではあるもののイシグロの作品に取り込まれている。つまり、こういうことが起きたのではないだろうか。イシグロがデビューしたのは 1980 年。この年に長崎を舞台にした短篇を上梓したことはすでに確認した通りである。この段階では、イシグロにとってノスタルジアとは日本（長崎）への郷愁を意味していた。しかし翌年父鎮雄が日本から上海のアルバムを持ち帰り、息子に自身の幼少時代の上海について思い出を語ったと考えられる。さらに 1990 年代後半に父子は上海の記憶を辿り直している。つまり、1980 年代から 90 年代にかけて父鎮雄との会話を通して、互いの幼少期の記憶を共有することで、1990 年代以降に幼少期の理想化というイシグロ特有の感情、すなわちノスタルジアが形成されたのではないだろうか。

この幼少期の記憶の理想化は重要な点である。福岡伸一との対談でイシグロはこう述べている——「ノスタルジーとは、幸せだった楽しい時間を想起するだけでなく、世界が善意にあふれた人々によるもっと美しい場所だと確信していたころを思い出すことでもあります。それは、決して存在しないとわかっている、ある理想的な場所の記憶なんです」（福岡 34）。ノスタルジアが喚起する幼少期の記憶はそれ自体理想化されたものである。大人たちの善意にあふれた世界だと確信できた時代を志向すること、それがイシグロの言うノスタルジアである。イシグロがノスタルジアについて語るときに、理想という言葉を用いるのは意図的である。別のインタビューで、イシグロはノスタルジアが“almost like the emotional equivalent to idealism”（Gallix, Guignery, Veyret 11）、つまり「理想主義の感情的等価物にほぼ相当する」と表現している。知性に訴える未来志向の理想主義も、感情に訴える過去志向のノスタルジアも、現実には存在しない理想世界を希求するという点では、イシグロの中では「等価」なのであろう。

さらにここで強調しておきたいのは、個人の記憶が他者と共有され、その記憶をあたかも自身の記憶であるかのように他者が捉えるという特殊なノスタルジア観がイシグロ文学で提示されているという事実である。*Never Let Me Go* (2005) の冒頭部で、クローンの介護人 Kathy はドナーの一人から繰り返し Hailsham での幼少時代を語るようにせがまれる (*Never Let Me Go* 5)。Hailsham ほど恵まれた環境で幼少時代を送らなかったそのドナーは、Kathy から彼女の幼少時代の思い出を聞き、それを自分の記憶に変換しようとする。つまり、自身が経験していない過去、知らない場所に対しても人はノスタルジアを抱くことができる——このイシグロの論理に従えば、イシグロ自身も直接には知り得ない祖父や父の過去の記憶を共有し、その記憶にノスタルジアを抱いているということになる。彼自身の長崎の記憶と父の上海の記憶とが融合し、幼少時代全般へのノスタルジアというやや特殊な感情がイシグロの中に形成されたのではないかと思われる。

おわりに

イシグロの祖父昌明が卒業した上海の東亜同文書院は、日中共存の理念を掲げて創設された。しかしその理念とは裏腹に日本は中国との戦争に突入し、書院生たちも日本の軍部に組み込まれる。昌明自身は戦争には招集されていないはずだが、彼自身が東亜同文書院時代に日中共存共栄の理想を叩き込まれたことは想像に難くない。幼いイシグロには知り得なかった祖父の過去、そしてそこから生じたかもしれない内的葛藤を、成人したのち両親から上海時代の話聞くにつれて、イシグロは祖父の来歴に思いを馳せたのかもしれない。理想に燃えた青年時代を回想する老人を初期の作品でイシグロが繰り返し描いたのは、祖父の来歴が頭の片隅にあったからではないか。その理想主義は上海を舞台にした *When We Were Orphans* の重要なテーマになっている。父鎮雄から幼少時代の上海の話聞いた1997年5月4日から二ヶ月が経った頃、*When We Were Orphans* を執筆中のイシグロは、次のようなメモを書き残している——“The book, as it is developing, is about the nature of idealism and ambition; that often these things derive in an individual from arbitrary misconceptions from childhood about one's role in the world, and one's search for love and companionship” (“Theme of Book 5/7/97”)。理想主義や野心といったものは、それを抱く人間がしばしば子供時代に自分の役割や愛と交わりへの希求について勝手な思い違いをしたことに起因すると述べている。*When We Were Orphans* の主人公 Christopher は、幼少時代に自らの判断ミスで母が連れ去られ（実際はそうではない）、その結果母の愛を失ったと思込む。両親の失踪について過剰なまでに責任を感じ、両親を救出することこそが自らの「運命 (fate)」(*When We Were Orphans* 313) だと自分に言い聞かせる。しかもそれは世界の救済という彼の理想と一体になる。つまり、Christopher の上海での幼少時代へのノスタルジアと現在の彼の理想主義は、どちらもその流れを遡れば、彼の思い違い (misconceptions) に行き着くのである（この思い違いは、日本人のアイデンティティを保つこと

を両親に期待されていると思い込む Akira にも見られる)。両親に守られた世界が壊されたとき、失われた世界へのノスタルジアとその世界の再構築という理想とが生成されるのである。

そしてイシグロ文学で提示されるこの理想主義とノスタルジアは、さらに遡れば、彼の祖父と父の上海体験に行き着く。もちろん昌明と鎮雄が過ごした 20 世紀前半の上海をイシグロは直接には知らない。したがってイシグロの頭の中にある上海は、祖父から父へ、父から子へと語り継がれることによって形成されたものである。あるインタビューで、イシグロは上海時代の祖父が写った家族アルバムを何度も開いたと語っている――

I used to look at these family albums, with photos of my grandfather in a white suit, in offices with ceiling fans, or posing in front of cars with big running boards, and it all looked to me like an old movie or something. And yet this was the same grandfather I lived with in quiet provincial Japan in my childhood. And it was odd to think that my father, who'd lived the last forty years in the leafy Home Counties of England, actually grew up there. (BookBrowse, "A Conversation with Kazuo Ishiguro about *When We Were Orphans*")

祖父から父へ、そして父から子へと語り継がれた上海の記憶が、一人の作家の中で熟成し、次第に彼自身の長崎への郷愁と融合しながら、彼のいう理想主義そしてノスタルジアへと昇華されていったとすれば、その文学には祖父と父の生き様が脈々と流れていると言える。それこそ祖父と父からイシグロが受け継いだものなのではないだろうか。

引用文献

- Ballard, J. G. *Empire of the Sun: A Novel*. Simon & Schuster Paperbacks, 1984.
BookBrowse. "A Conversation with Kazuo Ishiguro about *When We Were Orphans*." n.d. https://www.bookbrowse.com/author_interviews/full/index.cfm?author_number=477. Accessed 10 Sept. 2006.
Gallix, Francois, Vanessa Guignery and Paul Veyret. "Kazuo Ishiguro at the

- Sorbonne 20th March 2003." *Études britanniques contemporaines*. no.27, Dec. 2004. pp.1-22.
- Hunnewell, Susannah. "Kazuo Ishiguro: The Art of Fiction No.196." *The Paris Review*, vol.184, 2008, pp.23-54.
- Ishiguro, Kazuo. "Introduction." *Early Japanese Stories*. Belmont Press, 2005. pp. 5-12.
- . *Never Let Me Go*. Faber and Faber, 2005.
- . *When We Were Orphans*. Faber and Faber, 2000.
- Itoh, Keiko. *My Shanghai, 1942-1946*. Renaissance Books, 2016.
- Kazuo Ishiguro Papers (KIP). Harry Ransom Center. The University of Texas at Austin.
- . "Dear Kazuo." (Shizuo's letter to Kazuo, 3-11-1998) Box 86.
- . "EAST-WEST NOVEL Novel 3." Box 17, Folder 1.
- . "EAST-WEST NOVEL Novel 3 Another variation outline." Box 17, Folder 1.
- . "My father, Shizuo. ." (yellow stickers) Box 86.
- . "Notes: SHANGHAI After Photographs Conversation with DADDY (Shizuo) 4th MAY '97." Box 26, Folder 3.
- . "Theme of Book 5/7/97." Box 26, Folder 6.
- . "3 ideas for novels." Box 17, Folder 1.
- Mason, Gregory. "An Interview with Kazuo Ishiguro". *Conversations with Kazuo Ishiguro*, edited by Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong, UP of Mississippi, 2008, pp.3-14.
- Morikawa, Shinya. "Kazuo Ishiguro in Interviews: The Structures of Idealism and Nostalgia." *Bulletin of Yamagata University (Humanities)*, vol.18, no.3, 2016, pp.55-83.
- 東和男『創成期の豊田と上海 その知られざる歴史』時事通信出版局, 2009 年。
- 池田雅之の編著『新版イギリス人の日本観』成文堂, 1993 年。
- 石黒昌明「熱河紀行」『會報』(東亜同文書院學友會), 第 6 號, 1908 年, 30-43 頁。
- 稲葉勝三, 桑原哲也, 富澤芳亜「在華紡勤務 27 年の回顧 — 稲葉勝三氏(豊田紡織廠) インタビュー」『近代中国研究彙報』第 33 号, 2011 年, 1-63 頁。
- 榎本泰子『上海 多国籍都市の百年』中公新書, 2009 年。
- 大城立裕『朝, 上海に立ちつくす — 小説 東亜同文書院』中公文庫, 1983 年。

栗田尚弥『上海 東亜同文書院 日中を架けんとした男たち』新人物往来社、1993年。

鹿野政直「解説」大城立裕『朝、上海に立ちつくす』335-40頁。

「Sydenham's Voice」*Switch* 第8巻、第6号、1991年、99-102頁。

朱牟田夏雄『翻訳の常識〈読解力から翻訳力へ〉』八潮出版社、1979年。

西所正道『「上海東亜同文書院」風雲録 日中共存を追い続けた五〇〇〇人のエリートたち』角川書店、2001年。

林京子『上海・ミッシェルの口紅 林京子中国小説集』講談社文芸文庫、2001年。

平井杏子『カズオ・イシグロの長崎』長崎文献社、2018年。

福岡伸一『動的平衡ダイアローグ』木楽舎、2014年。

堀田善衛『上海にて』集英社、2008年。

森川慎也「カズオ・イシグロと理想主義」『年報 新人文』第15号、2018年、10-57頁。

劉建輝『魔都上海 日本知識人の「近代」体験』ちくま学芸文庫、2010年。

安澤隆雄『東亜同文書院とわが生涯の一〇〇年』愛知大学東亜同文書院ブックレット①、あるむ、2006年。

横光利一『上海』講談社文芸文庫、1991年。

